立教 150 年（昭和 62 年 /1987 年）3 月 22 日号

人間プリズム

天理生まれの画家の卵

さる有名な版画家が、芸術家として大成するために不可欠なものは何かと問われて、「自らの才能を見極める才能」と答えた。芸術で身を立てていこうとする者にとって、常に胸の内に問いかける命題なのだろう。

今春、金沢美術大学を卒業、さきごろ道友社第二ギャラリーで初めて油絵の個展を開いた川畑太さん（22歳・金沢市・旭日大教会所属）もその一人。同じ問いに煩悶（はんもん）しながら、故郷の天理で画家としての第一歩をしるした。

川畑　太さん

天理生まれの天理育ち。曽祖父の代からこの道の信仰に導かれた生粋の〝天理っ子〟。幼いころから絵が好きな少年だった。高校の美術部で一日に五時間は絵筆を持って精進を重ね、大学に進んで本格的に油絵に取り組むようになってその才能にいっそう磨きがかかった。高校時代からの出展を含めて、天展入選五回、道友社展表統領賞二回、奈良県展入選、独立展入選五回の経歴を持つ教内では将来を嘱望される画家の卵だ。

どちらかといえば人物中心の具象画が自らの作風という。「これからは自らの内面に潜む人間性や宗教性をキャンバスに描きたい」と語る。緑色を基調とした配色が特徴なのは、緑濃い親里での心象風景が無意識に浮かび上がったものか。

「とにかく自分の才能を信じてとことんやりぬくだけです」と川畑さん。冒頭の版画家は、言葉を足してこうも話している。「自分の才能を信じきって一生努力を続けた人もまた、芸術家として大成する」と。

立教 155 年（平成 4 年 /1994 年）3 月 22 日号

作品と人

心の扉　S100号（部分）

心象風景をカンバスに込めて

ニンフとは、ギリシャ神話に登場する自然界の妖精たちのことだが、この人の作品のモデルたちにもどこか、精霊を思わせる魅力を感じるから不思議だ。

作品の多くは、寒色系のブルー、グリーンを基調に、モデルと背景が相互にイメージを創（つく）り上げて全体を構成。作者の心象風景を豊かな感性と細やかな技巧でカンバスいっぱいに語っている。

「未来というものは、だれにとっても、吹く風のように不安定なものです。その漠然としたものからテーマをかぎ取り、ひらめいた印象を基本構図に、あとは筆にまかせイメージをドンドン膨らませていきます」

自由にのびのびと育った少年時代から、工作が大好きだった。分解したり組み立てたりと、「物」を自在に操り創意工夫に長（た）けた川畑さんは、やがて絵画に目覚め、高校時代には美術部に籍を置いて、本格的に油絵を描き始めた。

北陸・金沢で過ごした学生時代は、人物画を描く友人たちに囲まれ、「ならば、個性を持たせなければ」と人物を引き立てるべく、背景を多様にイメージ化させることに苦心。三年前に天理に戻ってからは、感性がさらに冴（さ）え、技術に一段と磨きがかかる。さまざまにデフォルメされた背景の具象が、渦を巻くようにうごめいて視覚に訴える。

「雲の流れもその一つ。身の回りを眺めては、イメージづくりのヒントにしますが、つくづく思うのは、この世に存在するものすべてが、親神様のお働きであるということです」

アトリエにこもり切れば孤独に包まれることも。だが、ニンフという妖精たちが豊饒（じょう）な生命をカンバスに与えてくれる。

◇

「川畑太　油絵展」は、3月12日から15日まで、天理市文化センター展示ホールで開かれ好評を博した。

天理市文化センターで油絵展を開いた

川畑　太さん

【かわばた・ふとし】昭和三十九年天理市生まれ。県立二階堂高校で本格的に油絵を始め平成元年、金沢美術工芸大学大学院修了。高校二年のジュニア県展賞を皮切りに五十九、六十一年には天理美術展表統領賞、平成二年同委員賞。これまで独立展入選六回、関西独立展新人賞など受賞作多数。現在、天理教校附属高校美術科非常勤講師。天理美術展委員。旭日大教会ようぼく。

全２ページ